

ヘイト本とホロコーストと戦争

眞鍋由比

「嫌中」「嫌韓」などをうたい、中国や韓国に対する差別意識や排外主義をあおるような本が書店の棚で目立つ。そんな中、ジュンク堂の難波店では店長の肝いりで相続税のコーナーから反ヘイト本のコーナーに変わった。「市場原理にまかせて隣国への憎悪をあおる本を並べていることに抵抗があった」という。

「いま、この国を考える」という河出書房新社の書店選書フェアでは想像力の大切さを訴え、「多くの人々が一つの価値観に染まってしまう傾向に危惧を感じる。ヘイト本のネガティブな言葉には、多様な価値観や意見を知り、他者への想像力を働かせることであらがるのではと伝えたい」と編集者は語っている。

ヘイト本と呼ばれるものを、背景を客観視する情報を持たずに読んで、正直に信じてしまうことを恐れる。言葉や絵の端々に悪意が練りこまれた本の影響は若い人ほど顕著なのではないか。

ユダヤ人だというだけでネガティブな感情を増幅された挙句、集団殺戮されたホロコースト。それがつい70年前に起こった出来事で、それについては映画、ノンフィクション、小説、演劇などさまざまなジャンルで語られている。

この夏に公開される『ふたつの名前をもつ少年』（原作『走れ、走って逃げろ』ウーリー・オルレプ作 岩波少年文庫2015）も実話をもとにユダヤ人だというだけで両親や兄弟とはぐれ、一人で森に逃げ込んで生きていかなくってはならなかった少年の話。母の顔も、自分の名前も忘れてしまった少年に父親が命を犠牲にしてかけた言葉「生きろ。助けを求めるときは貧しい人の方が助けてくれる」が印象的だ。

パレスチナ内戦が舞台の『戦場のオレンジ』エリザベス・レアード作 評論社2014 では、母を爆撃で失った少女が、唯一頼れるおばあちゃんの薬が敵地にしかなくて、それを命がけで取りに行く。敵地で薬をくれたライラ先生が「大人になっても人を憎まないで」という言葉もこころに残る。作者レアードは「悪夢に巻きこまれているのは、アイーシャやサマルのような子どもたちです。そういう子どもたちの命を、政治の指導者たちはいともかんたんに投げ捨てています」

「第二次世界大戦以降、この地球上で何年戦争がなかったか知ってる？ 1年もないんだよ。」（『となり町戦争』より）日本は70年、戦争がなかったことを誇り、幸せだったと自覚すべきだ。そして戦争をしている国をできるだけ止めさせてあげるよう努力すべきだ。なにより戦争が起こって犠牲になるのはどこの国でも絶対に弱い立場の一般庶民であり、政治家や指導者ではないことは自明だ。

少しでも相手を人間だと思えることができれば絶対に戦争は起こせない。ホロコーストは起こらない。違う意見や立場の人の身になってを考えるのは本当に難しいけれど、本を読むことはその練習をさせてくれる。ぜひ、今年の戦後70年読書運動推薦リストや「戦争をしらないYAのための36冊」、読んでください。